

中城ごさまる科第1回教材研究会

レジュメ

提供資料



2019年度 第1回 ごさまる科教材研究会

期 日：2019年6月28日(金)

時 間：16:00～16:45

場 所：吉の浦会館・中会議室

会 順

司会：稲嶺盛久(教育総務課主幹)

	中城小 1年	津覇小 1年	中城南小 1年	中城小 2年	津覇小 2年	中城南小 2年
1組	與那嶺尚美	宮城 友枝	吉本 勝美	加島そのえ	小波津久美子	高江洲ひとみ
2組	真栄平悦子	砂川 京子	照屋 大洲	城間 俊太	小渡心太郎	石川亜希乃
3組	石垣 樹理	石原かおり	渡久地恵美	大工廻愛梨		上江洲秀美
4組	宮平 郁子		宜保 奈穂			垣花 美里
5組			城間 友美			宮城 千奈

- 1 はじめの言葉・・・・・・・・・・・・・・司会
- 2 「ごさまる科」についての概要説明・・・・・・・・沖縄時事出版（富濱さん）
- 3 昨年度の実施状況報告
- 4 今年度実施に向けた意見交換
- 5 発表・まとめ

次回 第2回ごさまる教材研究会1・2年は、1月27日(月)16:00～吉の浦会館・中会議室

【ねらい】

「次代の中城村を担い、将来に渡って活躍できる人材を育む(中略)、世界遺産に登録された「中城城跡」や城主「護佐丸」等の故郷の歴史・文化・自然等を理解し、誇りや愛着を育て、自らの目標に向かって学び続ける」ような児童・生徒の育成(事業要項より)。

【副読本】

1年:中城グスクの成り立ち、先中城按司、護佐丸、ペリーの探検隊、一の郭の役場(小学校)を絵本で紹介

2年:護佐丸の生涯を読み物で紹介(フィクション)

【指導書 学年の内容】

1年:絵本を読んで、読書の楽しさ・内容の理解・想像する力を身に付け、さらには身近な人々とのかかわり合いの楽しさを知ることができるようにする。

2年:伝承されてきた護佐丸に関する物語を、想像を広げながら読むとともに、身近な人々と伝え合う活動を通して、地域に親しみと愛着をもつことができる。

つまり、「琉球史を学ぶ」に主眼を置いてなく、絵本や物語を読んで、その理解と共有、伝える楽しさを子どもたちに体験させてください。

ただし、「護佐丸」「阿麻和利」「中城グスク」にはまだわからないことがあります。発達段階を考慮すると、これらを線引して理解することは難しいですが、教える側にはその理解があるといい、と考えています。

また、指導書には、単純な用語説明や「パズルみたい(1年副読本7ページ)」など、その表現をした理由がわかる解説も掲載しています。その他にも、中城城跡年表(1, 2年)や視点整理(2年のみ)、全学年の副読本を網羅した用語索引、写真図版等索引などが掲載されています。これらを利用して、素材の理解を深めて頂ければ良いと考えています(素材理解のためのお問い合わせはいつでも受けつけています)。

その他に)

平成29年度には、中城南小学校2年で、生涯学習課の学芸員による出前授業が行われています(H30度指導書に指導案掲載)。

協力依頼(重要)

今年度の取組から生まれた成果物をご用意くださいませ。

報告書に掲載したり、次年度の研究会などに提出し情報の共有を図りたいと思います。



2019年度 第1回 ごさまる科教材研究会

期 日：2019年7月3日(水)

時 間：16:00～16:45

場 所：吉の浦会館・中会議室

会 順

司会：稲嶺盛久(教育総務課主幹)

	中城小 3年	津覇小 3年	中城南小 3年	中城小 4年	津覇小 4年	中城南小 4年
1組	比嘉 剛人	川畑ひとみ	原田 智恵	伊禮 勝則	山下 綾乃	玉那覇あつ子
2組	当真 千春	山城はたる	内間 東	米須 春香	石井 健一	熱田 脩
3組	新垣麻衣子	東江富士子	森本さおり			山内 千夏
4組	高森 昭吾		プラザ最子			

- 1 はじめの言葉・・・・・・・・・・・・・・・・司会
- 2 「ごさまる科」についての概要説明・・・・・・・・沖縄時事出版（富濱さん）
- 3 昨年度の実施状況報告
- 4 今年度実施に向けた意見交換
- 5 発表・まとめ

次回 第2回ごさまる教材研究会 3・4年は、2月5日(水)16:00～吉の浦会館・中会議室

【ねらい】

「次代の中城村を担い、将来に渡って活躍できる人材を育む(中略)、世界遺産に登録された「中城城跡」や城主「護佐丸」等の故郷の歴史・文化・自然等を理解し、誇りや愛着を育て、自らの目標に向かって学び続ける」ような児童・生徒の育成(事業要項より)。

【副読本】

1年:中城グスクの成り立ち,先中城按司,護佐丸,ペリーの探検隊,一の郭の役場(小学校)を絵本で紹介

2年:護佐丸の生涯を読み物で紹介(フィクション)

3年:世界遺産である中城城跡について,特徴や歴史,その保存と伝えるための工夫や努力を理解する。

4年:世界遺産である中城城跡を有する中城村の取組を,「守る」「生かす」の視点から捉える。

【指導書】学年の内容】

3年:地域の地理的環境とそれを生かした村づくりを理解できるようにし,地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。

4年:地域における社会的事象を観察,調査するとともに,地図や各種の具体的資料を効果的に活用し,地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力,調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。

つまり,「琉球史を学ぶ」に主眼を置いておらず,副読本を通じて,あるいは関わっている人を通して,3年においては中城城跡について,4年においては,中城城跡を「守る」「生かす」取組について触れさせるようにしてください。

考古学,文献史的には,「中城城跡」については,まだ,分からないことがあります。また,「護佐丸」は謎に包まれた人物です。発達段階を踏まえればこれらを線引きして理解することは難しいですが,教える側にはその理解があるといいと考えています。

また指導書には,「中城グスク歴史年表」(3年生用),「資料研究」(4年生)など,授業を進めるうえで教師が知っておいた方がよいと思われる内容をまとめてあります。ほかにも全学年の副読本を網羅した用語索引,写真図版等索引などが掲載されています。

その他に,今回,副読本作成後に入手した資料や文献などからまとめたものなどをこのレジュメに付していますので,参考にして頂けると幸いです。



その他)

護佐丸歴史資料図書館歴史展示室には,琉球の歴史を概観できる展示資料や中城城跡の精密なジオラマ,中城城跡からの出土物などが展示されています。また,グスクの特徴である石垣(城壁)の構造がわかるパネルも展示されています。専門の学芸員が常設していますので,来館をおすすめします。

協力依頼(重要)

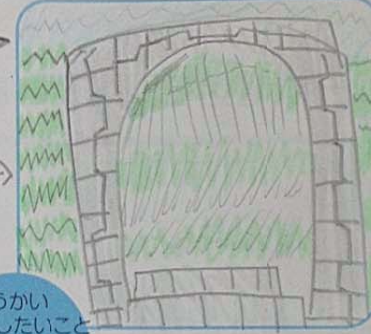
今年度の取組から生まれた成果物をご用意くださいませ。

報告書に掲載したり,次年度の研究会などに提出し情報の共有を図りたいと思います。

3年 二組 五番
(名前)

1

●しょうかいしたいことのイラストをかいてみよう!



しょうかい
したいこと

ベスト 3

2

石の種類

のずいずみの石
やまのずみあ
いかたずみの石
がある

3 了-子静儿

☆
ア、チモンの
石はぬのすみ
てで、ニエ、ま
すたふぬ

つくってみての感想

いまして、なか
がすくじみうはさ
でもすくいことつ
こみてすくいと思
ました。

学習クイズ

Q アイチも
でなんの石で
つかってるん
うか

答え (ぬ) のずみ ()

3年
2組
1番
(名前)

桑所
土垣
る
り

●しょうかいしたいことのイラストをかいてみよう!



しょうかい
したいこと

ベスト **3**

3

1

① 相方ずみ
② 里木面ずみ
③ めのずみ

いろいろなるしよ

2

昔のいどは
うつがーといふ
いどだった。

答え（あまわり）

学習クイズ



づーん、まるをせ
めてきた人は
だれでしょ、うか。

つくってみての感想

いろいろなことを
かいて、本のし
た。



ごさまるについて
知らせて

①

私、ごさまるについて知らせてすごいと
思、たことは、1月1日に初日の出を見らんが
あるということです。どうしてそう思、たかと言
うと、初日の出は、高いところから家から
でもみれるからいいと思、っていました。でも、良く
考えてみると、けしきはあんまりキレイじゃないな
と思、いました。でも、中城城跡は、けしきも
よく、キレイに見えるからあるんじゃないかな
と思、いました。また、日の出前には、ライト
でとされた三の叉、うら間がうかびあ
がるといふこともありました。次に私が

そういうこととしてふんだと思、たことは、

スマートフォンでアプリを起していることです。

また、スマートフォンで案内書きするのは、城跡
の説明、正問、うら間などたくさんあります。

全部で14ヶ所あるそうです。また中城城
跡にも関係のあるごさまるのはか、

台777の2ヶ所を合わせると16ヶ所

もあります。また、外国人にも、説明でき
るように、日本語、英語、スペイン語、

ポルトガル語、中国語(北京語、広東語)

といふ言語の5つの国の言葉でつくられています。

護国佐丸のちえ

護佐丸は争いに
も強かったそう
です。
護佐丸は、城を
守るために城
を高い所に作
りてきにせめ
にくくしていま
した。
石積みにあな
があいていて
います。あな
が、あいてい
る所を「チャー
ン」

石積井の石前

(豆腐積み)
 ☆ あい、かた積み
 (亀甲 カメノコウ 甜水 アメノミヅ 積み)
 ☆ と言います。
 ☆ てき てき がせめてく
 ☆ るのが見える
 ☆ とじゅうでこう
 ☆ げき げき ができる
 ☆ ようにしていま
 ☆ した。
 ☆ 護佐丸はとて
 ☆ も頭 あたま がいいです。

社說

わたくしは、^{ママ}佐丸のことがぜんぜん
わかりませんでした。
あと中城城跡の歴史もあまり
わかりませんでした。
でも中城城跡に行き、護佐丸
のことに、^{ママ}わかってきました。
とてもたくさん、^{ママ}んのことか知れた
いです。



木寸
づ
くり
新
聞

月日
27
年
1
月
28
日
(7k)

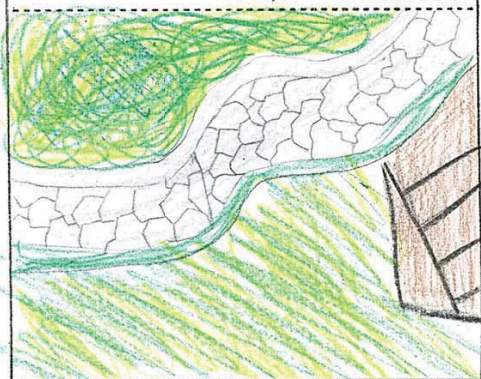
中
土成
土成
足办

(中城の
村島になつた)

中城城跡はいづいゝなこ
とも取りくんでいきますが、ま
だたりないことがたくさんあ
ります。たりないと思ふこと
はおみやげがないこと、そして
祭りのときとくに水がこんびる
のであともう少しふやしたほ
うがいいと思ひます。たとえは
中城城跡にかけいするキーホル
ダーやおかしなごうい。たものか
あるといいなと思ひます。なご
はり、せ、かくせたの、でまたな
うこととして、思ひでとしてあ
たほうがいいのがなと思ひま
す。今の中城城は、プロジェク
ションマッピングやビデオある
まったり、花をもでたり、

か、い、さんがついたり、はくつ、うさ
や、う、ふくをいなりといふ、いな
ことをとりこんでいます。ですが、
おみやがとかを作ったりすると
私は**親忙客**がもっとくると思
います。あと、ちょっとしたチリン
を作るなど、こいうたことを料
になつたらやりたいなと思つてい
ます。あと一番に考えたいなと思
っているのは、おと足がよいかと
な、じ、せ、くに見せびまると、うに考
えたいです。そして大人になつて小
い子どもたちにいる、いろいろな文
化を、**教**えていきたいです。ま、
まだたりないことをさがして見
て、か、こ、う、さ、く、ふ、や、し、た、い、で、す。

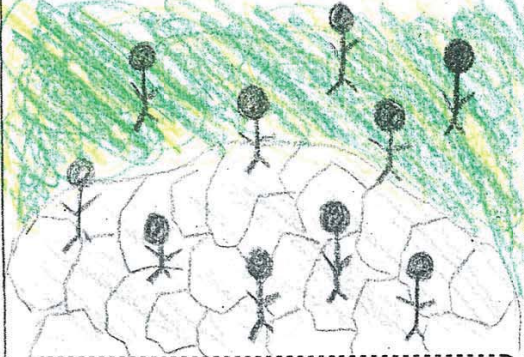
中城城跡のおみやげ



社説

中城城跡におみやげやつ
くりたいです。

かんこうまくのタ
人たらの村にしたい
です。



3年

―副読本9ページに関連して―
護佐丸歴史資料図書館歴史展示室には、3つの石積み技法とアーチ門のしくみが感覚的に分かるパズルが用意されています。



野面積み



布積み



相方積み



アーチ構造(アーチ門)

―副読本26～27ページに関連して―
中城村文化係が監修した想像図。
建物がすべて一階建てなのは城壁の高さから推測(強風で吹き飛ばされることのない高さ)。

―中城城跡 最新情報(2019年1月)―



崩れた一の郭北側の城壁(野面積み)



14C前半に積まれた城壁(布積みに見える)

14C後半築城と考えられてきた中城城跡の築城年代が早まりました(撮影:沖縄時事出版)。

4年

－副読本8～9ページに関連して－

発掘調査に関する記述は、3年副読本と4年副読本では異なっています。3年後半の社会科学習(昔の道具と人々のくらし)との関連から、当時の人の生活を視点の中心として紹介しています。

4年では、発掘調査が行われる本来の意図である修復保存(守る取り組み)の視点から取り上げています。

ただし、3年副読本の記述にあるように、発掘調査により出土した碗からこれを使用して食事をしてきたこと、武具(やじり, よろいのパーツなど)が出土していることから戦があったことなどは十分に言えることがらです。

－副読本9ページに関連して－

入れ物のふた(ハンネラという)は取っ手の一部分です(中城城跡から出土したハンネラには完品はありません)。

右は沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵のハンネラ(完品写真)です。この写真から副読本9ページ写真の部分をイメージして頂けるといいと思います。



3・4年共通

昔の中城城跡と現在の中城城跡はほぼ同じ姿をしている。ということは？



明治10年代に撮影された中城城跡(宮内庁書陵部所蔵)



大正6年発行『沖縄懸写真帖』に掲載された中城城跡



昭和20年4月10日から10月15日まで置かれた米第14師団の司令部
 (写真: 沖縄県公文書館 参考資料: 写真が語る護佐丸の居城 中城村教育委員会)



2019年度 第1回 ごさまる科教材研究会

期 日：2019年7月5日(金)

時 間：16:00～16:45

場 所：吉の浦会館・中会議室

会 順

司会：稲嶺盛久(教育総務課主幹)

	中城小 5年	津覇小 5年	中城南小 5年	中城小 6年	津覇小 6年	中城南小 6年
1組	加藤真理子	幸喜えり子	飯田 健一	浦崎 直樹	佐事 修	比嘉 育子
2組	大城 優	山川 宗志	又吉 紗彩	與儀 瑠璃		荷川取 真
3組			仲村 和美			塚田 牧子
4組						上江洲七美

- 1 はじめの言葉・・・・・・・・・・・・・・・・司会
- 2 「ごさまる科」についての概要説明・・・・・・・・沖縄時事出版（富濱さん）
- 3 昨年度の実施状況報告
- 4 今年度実施に向けた意見交換
- 5 発表・まとめ

次回 第2回ごさまる教材研究会5・6年は、2月6日(木)16:00～吉の浦会館・中会議室

【ねらい】

「次代の中城村を担い、将来に渡って活躍できる人材を育む(中略)、世界遺産に登録された「中城城跡」や城主「護佐丸」等の故郷の歴史・文化・自然等を理解し、誇りや愛着を育て、自らの目標に向かって学び続ける」ような児童・生徒の育成(事業要項より)。

【副読本】

1年:中城グスクの成り立ち,先中城按司,護佐丸,ペリーの探検隊,一の郭の役場(小学校)を絵本で紹介

2年:護佐丸の生涯を読み物で紹介(フィクション)

3年:世界遺産である中城城跡について,特徴や歴史,その保存と伝えるための工夫や努力を理解する。

4年:世界遺産のある中城城跡を有する中城村の取組を,「守る」「生かす」の視点から捉える。

5年(道徳):中城城跡,護佐丸,ボランティアガイドをモチーフに,「思いやり」「郷土愛」「社会奉仕」について考える。

5年(朗読劇):護佐丸と中城城跡の関わり(中城の民との関わり,民への思いなど)

6年:護佐丸の生きたころの琉球の歴史を理解する。

【指導書 学年の内容】

5年:地域の歴史・文化・人材を尊重し,それらをはぐくんできた郷土に親しみ,愛する心情を育て,豊かな心を持つことができるようにする。

目的に応じ,内容や趣旨をとらえながら読む能力を身に付けさせるとともに,読書を通して課題を見つけ,考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。

6年:琉球の発展に大きな働きをした先人の業績と優れた文化遺産について興味・関心と理解を深めようとするとともに,琉球の歴史や伝統を大切に,郷土を誇りに思う心情を育てるようにする。

5年生は中城城跡,護佐丸を取り上げ,「郷土愛」「奉仕の心」等について考え,「心情を理解しながら表現」する経験をさせてください。

6年生は下学年までに学習したことをふまえて,「護佐丸の生きたころの琉球の歴史」学習を設定しています。日ごろから触れている日本史に比べて難しく感じる内容もあるかと思いますが,教科書の既習事項と関連させて「同じところ」「異なるところ」に着目させ,考えさせるといいと思います。

ただし,考古学,文献史的には,「中城城跡」については,まだ,分からないことがあります。また,「護佐丸」は謎に包まれた人物です。これらをもとに6年生用副読本は「考えられている」「歴史書に記されている」といった説明にとどめているところもありますので留意ください。

指導書には,5年では,道徳・脚本を関連させた視点整理と中城グスク歴史年表(道徳のみ),6年では,現行教科書との関連(イラスト比較),事項解説の掲載など,授業を進めるうえで教師が知っておいた方がよいと思われる内容をまとめてあります。ほかにも全学年の副読本を網羅した用語索引,写真図版等索引などが掲載されています。

その他に,今回,副読本作成後に入手した資料や文献などからまとめたものなどをこのレジュメに付していますので,参考にして頂けると幸いです。

その他)

護佐丸歴史資料図書館歴史展示室には、琉球の歴史を概観できる展示資料や中城城跡の精密なジオラマ、中城城跡からの出土物などが展示されています。専門の学芸員が常設していますので、来館をおすすめします。

協力依頼(重要)

今年度の取組から生まれた成果物をご用意くださいませ。

報告書に掲載したり、次年度の研究会などに提出し情報の共有を図りたいと思います。

CD収録成果物

5年

ガイドされた感想

「中城城跡の紹介文」道徳授業より

6年

ワークシート

感想シート

関連情報 6年

ー副読本4ページに関連してー

銭の写真:琉球王国は基本的に無貨幣社会で、庶民は物々交換で物を得たと考えられています。ただし、各地のグスクから貨幣が出土しているのは、貿易に使われたからだと考えられています。

3枚ある内、左下の銭は洪武通宝。1372年、浦添グスクの察度(さっと)王に明王の使者楊載(ようさい)が冊封を促し、そこから中国との進貢冊封体制は1879年まで続きました。最初に冊封を促したときの王が洪武帝(こうぶてい)です。洪武通宝はこの洪武帝の時代(1368～1398)につくられた銅銭です。。

海亀の骨(腹部分):中城城跡に住む人が食していました。当時の食料は、按司などグスクに住む人は、米、麦、雑穀(粟、ひえなど)、魚に加えて、馬、牛などの肉も食べていました(出土物より)。庶民(=農民)は、雑穀、米、麦、魚、貝を食し、肉を食べることはほぼなかったと考えられています(副読本7ページ参照)。

ー副読本6ページに関連してー

グスク時代の住居。

2019年3月 『沖縄県史 図説編 前近代』(沖縄県教育委員会)93ページ参照

グスク時代

2019年3月 『沖縄県史 図説編 前近代』(沖縄県教育委員会)20～21ページ参照

グスク

2019年3月 『沖縄県史 図説編 前近代』(沖縄県教育委員会)122～125ページ参照

ー副読本10～11ページに関連してー

2019年3月 『沖縄県史 図説編 前近代』(沖縄県教育委員会)24～25ページ参照

ー副読本14～15ページに関連してー

2019年3月 『沖縄県史 図説編 前近代』(沖縄県教育委員会)26～27ページ参照

ー副読本19ページに関連してー

2019年3月 『沖縄県史 図説編 前近代』(沖縄県教育委員会)28～29ページ参照

ー副読本27ページに関連してー

中城村文化係が監修した想像図。

建物がすべて一階建てなのは城壁の高さから推測(強風で吹き飛ばされることのない高さ)。

ー副読本27ページに関連して(最新情報(2019年1月))ー



崩れた一の郭北側の城壁(野面積み)



14C前半に積まれた城壁(布積みに見える)

14C後半築城と考えられてきた中城城跡の築城年代が早りました(撮影:沖縄時事出版)。

中城城跡のガイドさん 中村 春吉さん



5年1組 番 前 比 嘉

ぼくは、中村 春吉さんにガイドをしてもらって、いろいろなことが分かりました。例えばアーチ門のしくみ、あいかたずみの石の角が何こあるか、中城グスグスの一のか、二のかには、だれがすんでいた。ちほうは火矢という名前で、2つの種類があって金づくせいの石せいの玉が2つの種類がありました。ほかにも、あいかたずみ、ぬのずみ、野すずみ、3つの積み方がもう見れかけなくて、教えてもらいました。ぼくが思ったことは、前の人にガイドをしてもらった人からもいろいろなことを教えてもら、たけど、また、中村 春吉のガイドのおかげで分からないことがあったけど、教えてもらったので、もう分からないことが少しはなくなったので、とてもうれしかったです。

ごさまる科 中城城跡・護佐丸

5年1組 番 前 比 嘉

知識・理解 (1問 5点)

1 護佐丸についてあてはまることを から選んで、文を完成させましょう。

- 座喜味の按司であった護佐丸を、中城に呼び寄せたのは (首里) の王様である (金鼓) です。
- 王様のきさは護佐丸の (おすめ) です。
- 護佐丸をたおしにきたのは (勝連) の按司 (あまわり) です。
- 護佐丸が次の王様と考えたのは (尚巴志) です。
- 護佐丸が残した宝は、護佐丸のこどもと、中城の民の (団結) 力です。
- 護佐丸が残した中城の (石積み) はすばらしく現在では (世界遺産) に登録されています。

北谷 読谷 孫 師
尚泰久 尚泰久 尚泰久 尚泰久
世界遺産 レッドブック 石積み いど



思考

2 護佐丸を知らない人に、あなたなら護佐丸をどう紹介しますか。あなたの護佐丸に対する思いもふくめて紹介文を書きましよう。

中城の歴史といえば、中城城跡です。護佐丸は、座喜味から中城にまわりました。護佐丸は、石積み、あいかたずみ、ぬの積みという積み方を覚えてやりました。護佐丸は、働き続けました。最後に、護佐丸は、あまわりたちがせめて死んでしまいました。あまわりたちがこころなかつた、生きていたがもし、水ません。彼は、依然と守つていきます。

護佐丸科 奥浜 陸翔



今日、護佐丸科という教科で、研究授業を行いました。僕は、こんなに大勢来るとは思いませんでした。しかも、テレビ局も来ると、緊張しました。でも、手を挙げて先生も僕をいっぱい当ててうれしかったし、先生が僕をほめてくれてうれしかったです。

そして、僕は1番伝えたい人は、あの世へ行つた、護佐丸や僕が産まれてない時に亡くなったおじいちゃんにも、今の中城城跡をゆうれいになつてもいいから見に行つてほしいです。そして、初めての護佐丸科の授業だったけど、発表もできてよかったです。もっと、護佐丸のことを知りたいです。

護佐丸 新垣 渡久

今日、5校時は護佐丸科だ。僕たちはテレビ局とか来る、先生達も来る、偉い人も来る。なんであつて、今日は授業参観だ。これが護佐丸か。教科書をみて僕はこう思った。

周りには人ばかりだ。緊張する。ワークシートが配られた。ワークシートには、分かったこと、思ったことを書いた。僕は、護佐丸について書きました。伝えたい想いを書きました。

フー終わった。先生達となりのクラスに行く。そしたらインタビューを受けている瑞夏さんと、月さんがいる。すごいな~と思いました。

ランドセルを準備して帰りました。今日の5校時は楽しかったです。また、護佐丸についてやりたいです。



護佐丸科 比嘉 真之介



僕は、5校時に護佐丸科の研究授業がありました。そして、護佐丸科は、昔の城にどんなだったかとか調べ、世界遺産とかも調べました。それで、世界遺産の中城城跡は、11番目 登録されました。世界遺産は、富士山とか、座喜味城跡とかあります。中城城跡はとっても景色が良くて座喜味城跡も見えます。中城城跡はベリーの絵が描いたのもありました。それで、護佐丸が何何屋さんと作ったところもありました。

ごさまる科について 新垣 昂平

今日は、「ごさまる科」がありました。今回まさかのテレビ局が来ていて、その理由は日本で初めての「ごさまる科」を代表して来ているそう。そして、授業が始まると、全員がだまっちゃっていました。テレビに写るからやんちゃできないみたいでした。そして今回のテーマは、前の社会見学のまとめのような物でした。そして、相方積みや護佐丸の事を勉強しました。その後に手紙のような物を書いて発表する事になってその中に僕もいました。その手紙にバイナブルを持ったドラえもんを書いたのはこの教室での秘密にしています。初めてでしたがとても楽しかったです。



ごさまる科をやつて 渡久山 瑞夏



今日、中城ごさまる科という科目が新しく追加されました。全国で初めてやる中城ごさまる科を見るために、村長さんをはじめ、仲村春吉さん、さらにRBCまで来ました。

まず、ごさまる科とは、中城の歴史を勉強するのがごさまる科です。

今日は中城城跡について勉強しました。今日のめあてにしたのは、「中城城跡を、5年2組から発信しよう。」でした。今日初めてごさまる科の教科書が配られました。ページをめくると中城のことがたくさんありました。授業の終わりに、誰へ中城城跡のことを伝えたいか?のプリントが配られました。僕は世界の、県外のひとと書きました。護佐丸や中城のことをもっと知りたいです。

○下の絵は昔の沖縄の風景です。絵を見て気づいたこと考えたことを書きましょう。



気づいたこと・考えたこと

○三山の領地について色分けし、王とグスクについてまとめましょう。



○日本の歴史年表と沖縄の歴史年表を重ねてみてみよう

日本	縄文時代	()時代	()時代	()時代	()時代	()時代
琉球	貝塚時代					グスク時代

日本	()時代	()時代	安土桃山時代	江戸
琉球	グスク時代	第一尚氏時代	第二尚氏時代（前期）	
	三山時代	時代		

日本	江戸時代	()時代	()時代	()時代	平成時代
琉球	第二尚氏王統（後期）	沖縄県		沖縄県	

○三山統一となるまでの流れをまとめてみよう！

スタート！
 の思紹・巴志

身近な建築資材で造ったアナヤ（穴屋）

グスク時代に普及した竪立柱建物は、沖縄では建築構造をほとんど変えることなくアナヤ（穴屋）として、首里城時代の長期にわたって存続した。アナヤは竪立柱建物と同様に丸太を直柱に組み立てる工法で、宮野座村松田遺跡（近世）では中央に中柱を有する遺構が確認されている。

アナヤの壁は竹を格子状に編み込んだもの（チブツ、チブツ）で、屋根は茅葺き、床は板材または土間で平らであるため、夏は涼しいが、冬はすき間風が入りやすい（地割）が不可欠だったと推測される。

竪立する柱は台所で、カマド周辺は不燃性の石積みや土壁などで防火対策がなされた。軒下は石で囲み、雨水が室内に入り込まない工夫がされた。

この竪立柱建物の建築様式が長期にわたり用いられたのは、身近にある建築材で容易に建てた住宅であったことが大きな理由だが、戦国末期の「御城普請の制書」（1737年～1803年）を受け、身分により屋敷の規模や屋根瓦葺きが制限されたことも忘れてはならない。この時代、沖縄の住居は自然環境だけでなく、社会環境の影響も大きく受けたのである。

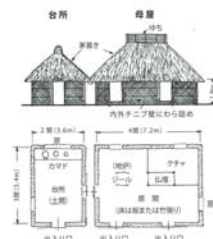


図10 アナヤ（穴屋）の断面図・平面図



図11 戦前の茅葺きの竪立柱建物（宮古島）の姿がほぼ復元された。この家屋の壁は竹を格子状に編み込んだもので、屋根は茅葺きで、床は板材または土間で平らである。

1-7 グスク時代とグスクの成立

■ グスク時代の特徴

グスク時代は、本格的な農耕・牧畜の開始、金属器の使用ならびに生産、周辺地域との交易が拡大、社会の階層化、国家の成立といった変革の時期であった。この劇的な時代の変り目に関しては周辺地域からの人々の流入と外部からの新たな技術の導入が、その要因として挙げられる。それを表すように、遺跡から大量の銅製農具や中国銭、そして青石製石臼などが出土している。

具体的には、グスク時代の初めである12世紀頃の遺跡から農具の鉄製品が出土することや、原料である砂鉄の貯蔵穴が発見されていることから、製鉄技術の導入がうかがえる。加えて、遺跡からウシやウマなどの家畜が出土してくること、列状ピット群や竪立柱建物など農耕に伴うとされる遺構がみられることから、新たな技術導入があったことがわかる。また、農具が主体であった貝塚時代の土器が、この時期に入るとグスク土器と呼ばれる器形を主体とする形式へと変化していく。それは、煮炊き用の器から穀物を貯蔵するための器へと、日用の器が変化したものと読み解くことができる。

これらの変化を基に、沖縄県内における土地の開発が活発化し、地域における生産力が向上していく。これらは社会の階層化や国家が成立してくる下地となる。それが結果した象徴として大規模なグスクを挙げることができる。

■ グスクの概要

現在見られる大規模なグスクの特徴は、丘陵上への立地、石積みや堀切などの防御施設の設置、中国産陶磁器や中国銭などの海外との交流を示す遺物の出土、柱網の整った建物群が挙げられる。

この大規模なグスクが出現する契機となる遺跡が、11世紀後半～13世紀前半までに機能した大湾アガリタウグスク遺跡（読谷村）である。出入口近くに配置された石積み遺構は、自然石を1m弱の高さに積み上げた極めて小規模なもので、四方は急斜面となっており、約3000㎡の空間が囲まれている（地形図に参照）。また、13世紀後半から機能するシナグスク（今帰仁村）は丘陵上に立地しており、小規模な石積みを一帯に配置して閉鎖的な空間を創り出している。内部には自然石が敷き詰められており、各所の小規模な石積みは石垣や土間の基礎やピット群（柱穴）が発見されている。

このように、11世紀後半～13世紀には、丘陵上に小規模な石積みや土垣を配置して閉鎖性を高めた遺跡が数多く見られる。他にもシナグスクのように平場造成が施され、恒久的な居住を前提とした空間を形成するといった事例もみられる。



図1 大湾アガリタウグスク遺跡の位置図



テーマ

B-5

B-5

B-5

B-5

■ グスクの発展

沖縄県内において、石積みを用いたグスクが14世紀後半～15世紀前半頃に多く見られることは発掘調査によって明らかにされている。このようなグスクの特徴として、大規模になると石積みで平場を完全に囲んでいる・出入口が複雑な構造となっている・堀り出し施設を配置している・大規模な建物を構築していることが挙げられる。

当初は、石積みを取り囲まない形態から、一定の範囲を取り囲んでいくのに対応して平場造成を行い、複数の建物を配置させていくことになる。やがて、中城グスクや今帰仁グスク、勝連グスク、座間味グスクのように、礎石・基礎建物と土間にセットとなる建物配置となっていく。このことは、首里自身もその発展を促すための礎石・基礎建物の構築と考えることができる。そして、第一尚氏以降の首里城正殿と御殿における首里城が国主に伴う権威の源流をここにみることもできる。

防御的機能については、中国大陸「馬面」や朝鮮半島「雉」といった海外諸地域の城郭で見られる堀り出し施設をグスクにも導入していくことになる。この堀り出し施設は、当初、矩形であったものが座間味グスクに見られるような曲線を連続していく形態へと変容していく。

出入口には、侵入を拒むために側射を活かした構造が取り入れられた。さらに出入口の空間を石積みで囲み、門を二重にするなどの防御強化を図るようになる。

大規模なグスクは、その周囲や石積み堀切が単に大規模化していくわけではなく、構造にも大きな変化が見られる。それは14世紀後半～15世紀前半にかけて、少人数から多人数を対象とする戦へと変化したといえることを裏付けている。

■ 変化するグスクの形と機能

15世紀後半には、各地で機能していたグスクの大半が終焉することになる。それは、各地域の最前線がこの時期に琉球王国の中心地である首里へ移住させられ、地域における権力を喪失したことと関連している。

一方、15世紀後半～16世紀にかけて王府によるグスクが新築されていくこととなる。交易品を運ぶための防衛する「御物グスク」、中国へ輸出するための税関を設ける施設を防衛する「税関グスク」である。両グスクは共に那覇市近郊に設置されており、海に面した丘陵上に立地し、石積みで取り囲んだ内部には交易品を保管する建物や配置されていたものと考えられる。だが、石積み以外に防衛的な施設は配置されていないという、極めて単純な形態となっている。

更に1553年に星加波森グスクとその前後の間に構築された三重グスクは、石火矢（大砲）を設置した王府の砲台である。これらのグスクは、那覇港への不審船侵入を阻止する目的で、あくまでも那覇港を守るための施設であり、グスクそのものを守るということとは意図していない。那覇港を両側から守るようにつくられた2つのグスクは、グスク相互の連携機能を重視している。以上のように、15世紀後半～16世紀にかけては、従来のグスクの形と大きく異なるグスクが創出されたといえる。



図2 座間味グスク礎石・基礎建物

図3 糸島島民のグスクに見る堀り出し施設

グスクの防御施設

■ 城壁

最も基本的な防御機能で、最も分かりやすいのは攻め手の侵入を拒む城壁である。グスクに見られる城壁には高さ5mを超えるものもあるとされている。



図22 シルクグスク（読谷村）の野面石積み



図23 切石を用いた座間味グスクの石積み

■ 出入口

遺跡域や中城グスクでは礎石・基礎建物のある空間にたどり着くためには3～4ヶ所から出入口を通過する必要がある。出入口はグスクが収められた地形に守るポイントとなるため、いくつもの出入口を連続させて防御を強化していくことが行われていた。また、出入口の前後にある空間は不規則となっており、通路空間としての役割を担っていたと考えられている。



図24 糸島島民のグスク

■ 堀切

グスクの中には防衛上観点となる堀切を分断するための堀切を設ける事例が見られる。主に奄美や沖縄北部に分布する石積みを用いたグスクで多用される。



図25 勝連グスクで確認された堀切



図26 勝連グスクの堀切断面イラスト

B-5 グスクの役割（機能）の変化



図27 首里城の御物グスクから王府への入口に設置された出入口の遺構

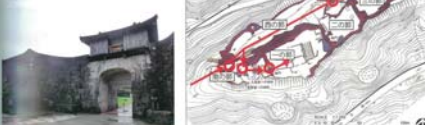


図28 首里城の御物グスク

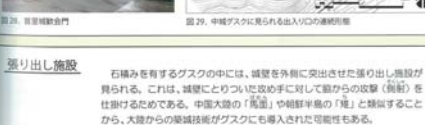


図29 中城グスクに見られる堀り出し施設の遺構

■ 堀り出し施設

石積みを用いたグスクの中には、城壁を外側に突き出した掘り出し施設が見られる。これは、城壁にとりついた攻め手に対して城からの攻撃（側射）を仕掛けるためである。中国大陸の「馬面」や朝鮮半島の「雉」と類似することから、大陸からの築城技術がグスクにも導入された可能性もある。



図30 中国福建省大興城の馬面



図31 糸島グスクの掘り出し施設



図32 今帰仁グスクの掘り出し施設

縄張りから見たグスクの発達—大規模化、複雑化していく平面プラン

第1段階
(13世紀後半～14世紀前半)

特徴：野営地から石積みを中心とした平面プランに発展している。また、内部の平面プランはあまり行われていない。



図33. シナガグスクの石積み



図34. シナガグスク（平面・アミ型部分）

第2段階
(14世紀中頃～15世紀前半)

特徴：石積みが全周し、内部は平面化が進み、一部に堀や土塁が設置されている。



図35. 具志堅上グスクの石積みと堀



図36. 具志堅上グスク

王宮としての用途が拡大していくグスク

15世紀後半以降になると、グスクは生活の場としての機能、そして防衛の性格としての機能がうまれつつあった。そのような中で、首領や令郎にグスクでは、複数の礎石・基礎建物で囲まれるようになる。また、大型の礎石・基礎建物と広域でグスクの中心部に配置され、拡充されていく状況が見られる。

これらの施設は王や後継者が集まり行うための場であり、王権の確立には必要な空間であった。争いの世の中から平和な世の中へ移行していきながら、グスクは王宮としての機能が色濃くなっていった。



図37. 具志堅の礎石（模型）

1-9 冊封・朝貢と大交易

■ 14世紀の中国と琉球

14世紀中頃ごろの中国大陸の動乱および倭寇勢力の活動に伴う中国沿岸の不安定化により、それまで前人が使っていた博多・寧波（中国）間の航行が困難となり、代わりに南九州から琉球諸島を通り福建に至る航路が利用されるようになった。以降、中国や日本との交易が頻りに増加した琉球諸島には、ヒトやモノが集中するようになった。同じころ沖縄島では、彼時と呼ばれる各地の権力者がグスクを拠点として勢力を争っており、しばしば三つの勢力（三山）に集約されていた。

一方、中国では、紀元の風で台頭した朱元璋（後の洪武帝）が1368年に即位して元を滅亡させ、みずから帝位につけて南京を都とする新たな王朝（明朝）を開いた。明朝は、周辺諸国に使者を送り朝貢を促し、明朝皇帝を中心とした世界秩序（華夷秩序）を構築しようとした。1405～1430年の間に7回実施された鄭和の遠征では、毎回2万人を超える人員で構成された大艦隊が、マラッカ王国、カリカット（南インド）、ホルムズ（ペルシア湾入口）、メッカ（アラビア半島）、モガディシュ（東アフリカ）、マリンディ（東アフリカ）などを訪れていた。

明朝が世界中に新しい王朝の存在を知らしめようとするなか、琉球も明朝の構築する世界に参加することとなる。そのきっかけとなったのは、1372年に沖縄島を訪れた福建であった。洪武帝からの使者の要求に応じた中山の鄭和は、参朝を派遣し明朝との外交関係（冊封・朝貢関係）を構築し、琉球国中山王に封ぜられた（冊封）。皇帝へ使者を送る貢物を献上することとなった（朝貢）。鄭和の遠征で、1380年には南山の参朝が、1383年には北山の参朝が使者を派遣し、それぞれ明朝と朝貢関係を開始した。

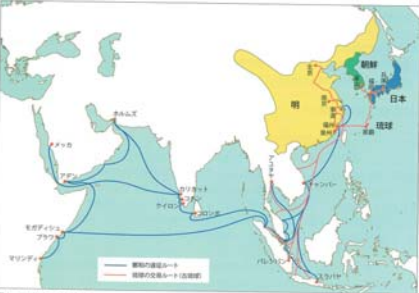


図1. 14世紀の琉球国

1-10 琉球国の成立（三山統一）と領域の拡大

■ 三山統一をめぐる問題

14～16世紀にかけての、琉球国の内情については謎が多く、どのような経緯で琉球国が誕生したのか、という点で有力な定説はない。それは琉球国内の歴史を伝える文字資料が極めて少なく、外国史料や考古学の成果から推測するしかないからである。

1372年、琉球国中山王鄭和の参朝は、琉球史の一つの大きな転点となることとされた。外からの働きかけによって、琉球国が国際舞台へ一歩を踏み出したのである。

以来、琉球国の成立については一般的に、17～18世紀に編纂された正史の『中山世鑑』『中山世系』『琉球略』などから、次のように推測されてきた。沖縄島には、南山・中山・北山の三つの政治勢力が分立していた。その中で最も優勢な南山の鄭和が1416年に北山王（今帰仁城主）を攻め、ついで1429年に南山王（大聖城）を討ち滅ぼし、三山を統一した、というものである。この説立方に対して、南山は最初南山を攻め、その後1405年に中山を攻め、1422年に北山を討伐したことから、三山統一は1402年である、との見解もある。従来の三山統一説を見直すものであるが、いまだ定説とはなっていない。ここでは三山統一の時期をおよそ1420年代として位置づけておきたい。

思川・向山父子による第一尚氏政権は、遅くとも1427年までには、添添グスクから首里へ政治の拠点を移した。1422年に向山王の次男向山を今帰仁グスクに駐せたとある。向山の役割は、後の『山北監守』に引き継がれた。そのことから1422年には、

首里王府による沖縄島北部地域への監視体制が築かれていたと見てよい。このように第一尚氏政権は、島内支配の強化と同時に、周辺島嶼への支配を強めていった。およそ15世紀後半～16世紀初頃において、第一尚氏政権は東北の奄美諸島と南西の宮古・八重山諸島へ支配領域を拡大する征伐戦争を行っていたからである。



図1. 18世紀の史料を元に三山の領域拡大

■ 北方への領域拡大
近年、奄美諸島・宮古島の研究が注目されている。九州南部の島嶼が琉球島に属していたことによる。奄美諸島には琉球に北方からの影響が見られるとともに、同地域には独自の発展もみられた。そのような奄美諸島に対して、第一尚氏政権による軍事行動が15世紀初頃に行われていた。1441年頃、あるいは1446年頃、第一尚氏政権へ参

石積みを持ったグスクの平面プランをみると、その石積みの配置から防衛的な性格がみえてくる。さらに、グスクの「縄張り」が発達していく過程とグスク内部の体積が蓄積していく状況が関係していることが読み取ることが出来る。

第3段階
(14世紀後半～15世紀中頃)

特徴：石積みが増え、規模が大きくなる。中心となる礎石・基礎建物が複数あり、礎石・基礎建物が囲まれるようになる。



図38. 具志堅上グスクの礎石・基礎建物



図39. 具志堅上グスク

第4段階
(15世紀～16世紀)

特徴：通廊の空間が見られるようになり、石積みが増え、規模が大きくなる。中心となる礎石・基礎建物が複数あり、礎石・基礎建物が囲まれるようになる。



図40. 具志堅上グスクの礎石・基礎建物



図41. 具志堅上グスク

琉球諸島

■ 琉球諸島政策

琉球が明朝との通交関係を結んだころの東アジア世界は混乱していた。そのため洪武帝は海上交通・海上貿易・漁業などを統制する海禁政策を展開する。しかし、海上には合法的に明朝と取り引きできる勢力が一定数存在することとなった。彼ら（倭寇）「海寇」などと呼ばれた海上勢力は、中国北方から南下をめざすモンゴル勢力とともに明朝にとって脅威となっていた（元寇）。
ところで朝貢にあたっては、各国に一定のルールが設定されていた。例えば日本の場合、朝貢の機会には10年に1度（十年一度）、明朝へ必ず使節を送るという規定があった。しかし琉球の場合、いつも朝貢に赴いて、どこかの港から入っても問題とされず、さらには朝貢で用いる船が明朝から支給されるなど「特別扱い」になっていた。

琉球が明朝から優遇された背景には、海上勢力の横行があった。明朝は、海禁政策により排除した「非合法」の勢力を琉球の朝貢使節に組み込むことで、海上の安定を目指していたのである。実際、琉球の朝貢使節には琉球以外の出身者も含まれており、15世紀の琉球を指して「琉球国」（1696年）の前身には、日本、中国、琉球などさまざまな出自の人物が在籍していたことが示されている。

■ 貿易の発展

明朝による優遇もあって、琉球は貿易を拡大させていった。朝貢品のなかには琉球では生産しない日本の物品（武器・道具・絹）や東南アジアの特産品（香料・香木など）も含まれており、それは琉球がシャム、マラッカ、バタヴィア、マジャパヒットといった東南アジア諸国や日本、朝鮮半島をまたがけけた貿易活動を開発していた現れでもあった。まさに「万国津梁の國」（万国通商の國）の琉球であった。

15世紀の琉球では、第一尚氏による三山統一や、金丸（のちの尚氏）による第二尚氏への交替といった政治的な動向があった。尚氏の字である尚氏王は、奄美諸島や宮古・八重山地域に進攻して領土を拡大しつつ、中央集権的な政策を推し進め、王権を強化していった。

しかし、倭寇や北方民族など周辺勢力の圧力や活動拡大に悩まされる明朝は、海禁政策を緩和させ、税関の貿易も許可するようになっていった。これにより中国系商人の活動が拡大し、さらにはこのころからじつと西進勢力が東アジア進出によって中国の貿易網が多様化していった。その影響もあり、15世紀後半から明への朝貢が二年一度に制限され、明朝によって優遇されていた琉球の貿易はさらに衰退していった。

時期をわけるように、琉球と日本との関係も悪化していった。16世紀中頃に領土の統一を強めていた島津氏は、薩摩藩を通る琉球行きの税関船を管理する琉球を保護的な存在として扱うようになっていく。さらに、豊臣秀吉が朝鮮半島に侵襲すると、琉球への圧力も強まっていった。中国や日本での勢力関係が変化するなか、琉球の貿易活動はさらに小さくなるを得なくなり、日本からの外圧が大きくなる状況下で、琉球は1609年に島津氏による侵略を受けることになる。



図2. 琉球の貿易網

琉球諸島

■ 南方と西方への領域拡大

したとされる。ただし、1450年代には奄美大島北部の豊前地方へ琉球王弟の参朝が派遣されており、琉球王弟の参朝行動が継続されていた。「琉球略」の記述が容易ではなかったことを物語っている。また、1453年頃のトラカ列島は、琉球と薩摩がめぐり合う領域で、琉球王弟の参朝が琉球と薩摩の境界線と見られていた。『中山世鑑』には、1537年に奄美大島の「諸島」である大隅大島による「謀反」の動きが見られるとして、その鎮圧のために第二尚氏が派遣されるという事件が記されている。第一尚氏、第二尚氏王による北方への版図の拡大は、野合曲を経てなされたのである。

一方、第二尚氏王による南方の宮古・八重山諸島への支配領域の拡大は、奄美諸島の征伐戦に先行した。宮古・八重山が琉球王弟の勢力下に置かれたのは、1500年の琉球国史による征伐戦争を契機とした。この出来事は、向山王の治績をまとめた『首里参朝ノ記』（1509年）に次のようにある。『琉球略』の西南の方面に宮古があり、太平山といふ。1500年（弘治8年）年の春、戦艦100艘を派遣し、太平山を攻め、その國人は海舟に留められた。翌年、（琉球）へ参朝して、歳貢（年貢）として穀物・布等を納めた。これによって上国（琉球）の勢力はますます盛んとなった。

後世の史書には、宮古の首長・仲宗根重親が王府の先遣使を勧め、中山王とともに八重山を攻撃したとある。琉球国史による八重山征伐戦争であったことが分かる。
参朝の西方に位置する久米島にも王府史は遠征していた。同時代の史料は確認できていないが、後世の『琉球国史』などに、久米島のマコト権臣は「正徳元年（1715年）に参朝して、中山王から「臣民」とされた。太平山への参朝から見て1500年（弘治8年）の出来事であった。中山王を中心とした政治勢力の拡大は、まず北方の奄美諸島から始まり、その後、南方の宮古・八重山地域へと拡大された。最後に西方の久米島を組み込むことで琉球国の領域が拡大したことになる。

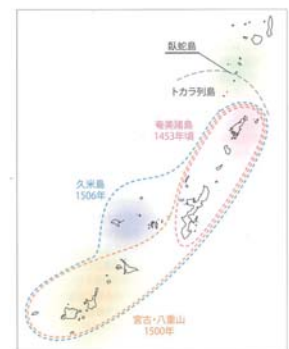


図2. 琉球の領域拡大

■ 仏教の伝来

琉球へ仏教が伝来したのは13世紀中頃といわれ、当時の琉球は、各地の藩閥支配者の諸侯が勢力争いを繰り返していた。その中の一人である英祖王が豊城の浦添城の西に極楽寺（後に龍福寺）を建立し、郡縣に準じた僧侶・神職を住まわせたことが仏教伝来の始まりとされている。

その後14世紀初頭までに、沖縄島は南山、中山、北山の三地域による統治が導かれた。15世紀初頭に南山の尚巴志が三山を統一し、第一尚氏王統が誕生して琉球史上初めての統一国家が樹立され約70年間続いた。

■ 琉球の王統と梵鐘

1) 第一尚氏王統と宗教政策 ― 仏教定着へ ―

第一尚氏の尚泰久と尚徳、第二尚氏の尚円と尚眞の各王は、中央集権化の過程で「仏教」を重視する宗教政策を展開している。

当時の東アジア状況では、室町幕府第8代将軍足利義満（在職：1449～1473年）から九州の諸藩を任せられた大内教弘が、日明貿易に強い実権を持っていた。尚泰久と尚徳は、京都で仏教僧侶を招聘する政策で使者を送り接している。尚泰久以降尚眞の各王と外交及び仏教関係政策で重要な役割をするのが京都五山禅僧の宗義系統である。当時の日本と東アジアとの繋がりを象徴するのが、この時期に製造された「梵鐘」である。

尚泰久王は就任して間もない頃、1456年に大聖神寺、龍門寺、天徳宮、天徳寺など首里・那覇地区に10口の梵鐘を配置した。さらに翌年からの3年間に上・下天徳宮、永福寺、首里城正殿（「万国津梁の鐘」）、越来城、大聖城、龍海寺など仏教寺院だけでなく城や天徳宮にも14口の梵鐘や雲板を配置した。1457年には朝鮮から大聖城が琉球へもたらされている。さらに次代の尚徳王も1466年に天徳寺に、1469年に龍門寺に梵鐘、1467年には朝鮮からもたらされた朝鮮鐘（956年製造）を道上天徳宮に配置するなど、国家の宗教政策に仏教文化を強力に導入している。

梵鐘は、日本や中国からの船が出入りする港近くの寺院や天徳宮にも配置されている。梵鐘の音色は、古琉球の琉球国の政策志向に中国、朝鮮、日本など東アジア各地の人々と共有できる宗教文化を重視していることを国内や琉球を訪れる異国人に知らせる効果もあった。つまり、この時期に国内の政の場である城や東アジアから入ってきた諸藩（天徳）廟や神社寺へ配置する梵鐘は、「仏教」の枠を超えた東アジアと共有可能な文化を持つ国家像が可視化され、その音色は国際性を持つ王統の象徴であった。



図1. 梵鐘をめぐる琉球関係

図2. 月読寺仏鐘
右側が右側に鐘が掛けられている。

2) 第二尚氏尚眞王と仏教

琉球の古来からの民間信仰体系は、「聖」なる領域での祈りを神女（カミンチュ）・神女の女性達が主体となり、村落や家庭における祭祀や行事が行なわれる。15世紀以前から沖縄各地にあった女性の霊的優位性は、「姉妹（オナリ・ウナイ）の霊力が兄弟（エケリ）を守護する」という琉球の土着的な「オナリ神信仰」を基盤に持つ。それは政治権力を持つ男性を支える近衛者の女性との関係にもみられる。

尚眞王代からは、外來の中国や日本の宗教文化だけでなく、古来から甞る自文化の宗教的ありようを重視した宗教政策の「琉球化」も展開された。第二尚氏の尚眞王は、国の宗教政策に神女信仰・制度を整備し琉球独自の制度を確立し、第一尚氏との違いをみせた。同時に、神仏社寺を充実することも引き続き政策として展開している。

1494年に創建された首里城下の円覚寺（神宗）に仏像を運び、瓦葺の仏堂や欄干、経路と鐘楼を建立し、1495年から翌年にかけて3口の梵鐘（圓前鐘、圓中鐘、圓後鐘）を配置して、普賢寺とした。尚眞王代には、神女制度と仏教（当時神仏混交）を軸に宗教制度が確立している。

梵鐘は、仏教寺院で「時」を知らせるために打つ大型の鐘で、アジア各地で使用されており、15世紀には王権により「時」を統制するシステムも整ったことになる。

■ 琉球梵鐘の特徴―製造技術―

琉球の梵鐘は、朝鮮や中国の影響ではなく、日本の和鐘の形制である。その多くは当時琉球と交流のあった九州・山口の大内氏領内の豊前・今津や美濃・岐阜の技術で製造されている。中には銘文に銘を大工名に花城や大内と記された梵鐘もある。また尚眞王代の1697年に再製造された円覚寺鐘楼の鐘は、京都室町の鐘物師宗義が手掛けた。梵鐘は北九州、朝鮮半島、京都との技術交流も物語る。

15・16世紀の琉球における文化史資料が少ない中で、他県と比較して、多く現存する18口の梵鐘（うち16口は沖縄県立博物館・美術館所蔵）は、当時の精神文化を物語る貴重な資料である。多くの文化財が沖縄戦の戦禍で消滅した沖縄では、その戦禍をくぐった歴史資料として、現存する梵鐘の多くは県指定有形文化財に指定されている。



図3. 首里城の圓アザナに掛けられた鐘（19世紀）

